

コーチング解体新書

～やる気を引き出す源泉を探る～

その5 ビジョンを語る、語らせる



猪俣 恭子

中央大学文学部卒

卒業後足利銀行に7年間勤務。窓口業務を経て、人事部研修グループで社内研修の企画・運営および講師を担当。結婚を機に退職してからは、実家の印刷会社に従事する一方、パソコンスクール講師として教育活動を行う。2004年からはコーチングを用いた社内の人材育成を手掛け、「良質なコミュニケーションが実現されている現場こそがビジネスの成功をうむ」と実感し、2006年Coaching Press株式会社を設立、代表取締役として現在に至る。

財生涯学習開発財団認定マスターコーチ

季節、春ともなれば初々しい新入社員が軒並み顔をそろえる頃。それは数年前、ご多分にもれず、つい先日まで学生だったIさんが新メンバーとしてわが社にやってきました。Iさんの指導係としてやる気十分の私は、早速こんなことを彼に聞いてみました。

「ねえ、この会社に入って、やってみたいことって何？」

どんな言葉がでてくるか、それはわくわくと楽しみに待っていたら、

「そうですね～。とりあえず、車が欲しいですね。」

「……………。(なんだ、そりゃ?)」

「あのね。そういうことじゃなくて、仕事のこと聞いているの。仕事での目標はどんなの? (既に詰問調)」

「あっ、視線およぎ、あたふたと動揺する。) 仕事では…まずは自分に与えられたものをしっかりやる…です。」

なんだかがっかりだなあ。20歳ってこんなものなのかなあ。仕事の目標とかビジョンとか、持ってないのかしらね。

ふと、自分のことを思い出しました。うちは曾祖父の代からの自営業。一人娘の私は父が経営する印刷会社に入社したものの、仕事に没頭すればするほど、本当に自分のやりたいことは他にあるとの思いが強くなる日々を悶々と送っていました。本当は企業研修の仕事がしたい、なのに、

こうした自分の気持ちに嘘をつきながら生きていていいのだろうか? ある日、勇気をもって父に打ち明けました。

「実は研修の仕事がしたい。」と。かえってきた言葉は、「そんなので生活できるか。仕事がそれほどあるとも思えない。それにどうやってやるつもりなんだ。父さんもやりたいことはあったけど、ここで頑張ろうと思ってやってるんだ。」

そして私のビジョンは少しずつ埃をかぶっていきました。そこに再び光がさしたは4年前、きっかけはコーチとのセッションでした。「実はずっと気がかりなことがあって。印刷会社のことはとても大切に思っているんですが、どうしても気持ちがのってこないんです。本当は…。研修の仕事がしたいと思っていて…」返ってきた言葉は一言。「素敵じゃない! もっと聞かせて。」

それから、どうして研修の仕事がしたいのか、それを通して実現したいことは何なのか、研修を受けた人たちにどうなってほしいのか、それができると自分はどんな気持ちになれるのか、どんな研修がしたいのか、研修は自分にとってどんな意味があるのか…。

気づいたときには、話し始めてゆうに30分はたっていました。今一度自分のビジョンを信じてみよう、不思議と勇気がふつふつとわいてきた感覚を今でも覚えています。

ビジョンを人に語るのはとても勇気がいること。なぜならば、そんなことできるの? なんて言われて安易に傷つきたくない、笑われたくない、あきられたくない。そして、

人は次第に無難なことを言うようになっていくのだと思います。だからこそ、ビジョンを自由にのびのびと語れる相手が身近にいれば、人はどんどん伸びていくのではないのでしょうか。

話はIさんに戻ります。彼に目標やビジョンがないなんて決めつけしないで、もっと彼を信じるころから再スター

トです。

「ねえ、Iさんはさ、学生から社会人になって、人生、これから自分でデザインしていく自由を手に入れたんだよね。これからどんなふうになっていきたい? なんにも制限がないとしたらさ、どんな仕事してみたい?」「中学、高校、専門学校とか、今までを振り返ってみてね、Iさんの成功体験ってどんなのがあるの? 是非聞かせてよ。」

そんな問いかけ続くこと2ヵ月間ほど。Iさんは最初のほうこそ、ごまかし笑いをするなど多少困惑モードでしたが、少しずつ自分の内側にある思いにじっくりと向き合う、そんな様子へと変わっていきました。

「実は、自信がないんです。」

「自信がないっていうと…?」

「高校のとき、試験ができなくて…。勉強してもわからなくて…。自分って馬鹿なんだあって…。だから、専門学校入ってからは一生懸命やったんです。もうそんな自分にはなりたくなくて。将来は…。映像制作やってみたいんです。人をあっと言わせるような、感動してもらえるような、そんな映像つくってみたいです。目標にしている人もいて、その人、本当にすごいんで人なんですよ。」

「モデルにしている人がいるんだ。いいなあ。何年後にはその人みたいになりたいの?」

「あまりにもその人とは差がありすぎて…。ちょっと想像できないですね…。あのお、俺…。俺、ピックになりたいんです! ははっ、(笑) 言っちゃった! (照れ笑い)」

「いいじゃない。素敵じゃない! 目指そうよ、その人。」

「近づけるかなあ。」とIさん、まんざらでもない様子。

「ねえ、うちの会社で何を学べばその人により近づけるようになるのかな?」

「やっぱり…。仕事の基本っていうか、社会人っていうのをしっかり学びたいですね。自分、まだまだ甘いところがあると思うんで。だから、仕事をきちんと任せてもらえるようにまずはなりたいです。」

そう語る彼は20歳のおにいちゃんではなく、将来を見据えた青年の眼差しをしていました。

さてさて、それから季節かわり秋の頃。とうのIさんがこんなことを言ってきました。

「猪俣さんってすごいと思うんです。自分の夢をどんどんかなえていってるじゃないですか。日本コーチ協会の栃木支部たちあげて、コーチングの会社もつくって…。すごいなって…。」

「えっ、そう? ありがとう。(照れる。)でも、Iさんだって叶えたじゃない。ほら、車、買ったじゃない!」

「いやあ、猪俣さんにあの時はすごく怒られたけど。(笑)」

「ええーっ! 怒ってないってば。(よく覚えているな。)」

ビジョンを語る、語らせる。そこには人の行動を未来へと向かわせる大きなチカラがあるようです。さて、今年の新人諸君のビジョンはいかに? 何がでてくるのかとても楽しみです。



コーチングプレス株式会社

〒320-0817 宇都宮市本丸町2-20

電話 028-634-7640 FAX 028-636-7855

<http://www.coaching-press.com/>